

甲田の裾

KŌDA NO SUSO



さくら保育園、藤保育園 植樹「大きくなあ～れ！」

2015

2
春
号
通巻685号

松丘保養園の機関誌

松丘の森プロジェクト

松丘保養園慰安会の「松丘の森プロジェクト」(仮称)の一環で、園内の緑化運動が推進されております。4月17日は鹿内組及びコマツ販売が会員である青森日本花の会から寄贈の八重桜の苗木20本を近隣住民と入所者が植樹。28日は、園内さくら保育園、藤保育園合同で桜の植樹。5月11日には、職員と入園者の共同作業で青森日本花の会より寄贈の花の苗を納骨堂周辺に植えて花壇整備が行われました。



4月17日 近隣住民との植樹(左:自治会長、右:鹿内組木村専務)



4月28日 さくら保育園園児たち



4月28日 藤保育園園児たち



5月11日 納骨堂周辺花壇整備(青森日本花の会より寄贈の花苗700鉢)



甲田の裾 平成27年2号 通巻685号 目次

寛仁親王殿下の思い出	会計班長 三橋 守人	2
新任のご挨拶	庶務班長 狩野 智行	4
お久しぶりです	病棟 看護師長 寺嶋 美由貴	6
隨想 一木一草あれやこれや(5) — 弥助親方狂想曲 —	滝田 十和男	8
弟	三浦 喜美子	16
主の家に私は帰り — 安本赫道さん追悼 —	金 美淑	23
野の花の微笑み(12)	比良 信治	29
人事異動①		33
短歌 白樺短歌会		34
人事異動②		36
松丘のニューフェイス紹介		37
自治会日誌・編集後記		40
松丘保養園慰安会賛助会員募集		42

表紙写真・写真提供 福祉室

「甲田の裾」バックナンバー(平成24年1号～)は
下記ホームページより閲覧いただけます。

松丘保養園のインターネットホームページ
<http://www.hosp.go.jp/~matuoka/>



寛仁親王殿下の思い出

会計班長 三橋守人

この度、四月一日付で国立病院機構青森病院から転任して参りました会計班長の三橋守人です。私自身の当園の勤務は三回目で、前回の平成二十一年四月から二十四年三月に勤務して以来の勤務になります。

三回目ともなると、私自身のことを書いても食傷気味の感は否めず、筆が進まないこともあります。今までの勤務で思い出深かつた寛仁親王殿下のことなどを書いてみたいと思います。

私が寛仁親王殿下と最初の関わりを持ったのは、平成十三年十月十二日に開催された「貞明皇后・高松宮をしのぶ会」になります。式典では藤楓協会総裁として、信子妃殿下とご一緒に臨席されました。これに関しては日本財団の電子図書館に詳しいのですが、今も委託治療で来園されている高橋先生のお名前も見受けられます。楓音楽クラブの写真には、職員の山口幸子さんや岡野真理子さんの写真などもあり、懐かしい限りです。

この頃の殿下は時折体調を崩されることはあるても、まだまだ健康で、とりわけ青森県にはご関心を示されており、岩木山のスキーマラソン大会や当園とは至近の距離にある青森競輪場で寛仁親王牌が開催される折など、度々ご来県なさいました。

この時の殿下のお言葉は「これから健常者とどう共生していくか…」となっています。

殿下も入園者との社会の関わり方といった方向に、お心が向いていたように思います。

次に殿下にお目にかかれたのは、平成二十一年五月三十日の新棟落成記念式典です。この頃

には度重なる手術により、声を失われておりました。その時のお言葉で印象に残っているのは、何より入園者とまた会えたこと、また、皇室と全国の入園者とのよすがとなつてきた藤楓協会の解散についてのご発言でした。当時は記念館の運営を巡つて藤楓協会の「継承」団体であるはずのふれあい福祉協会との一件があり、殿下の藤楓協会がなくなつたことは、今までの皇室と入園者の関わりを思えば身が引き裂かれる思い、とのお言葉には衝撃を受けたものです。

殿下はご自身が人工咽喉を使うご不自由な身でありながら、入園者の前で訴え続けること、また皇室の入所者に対する思いを述べられることで、入園者に希望を与えようとしたのではないかと思います。

平成二十五年に発行された「ハンセン病講義」の中で隔離政策に対する皇室の役割を糾弾する部分がありますが、実際の関わりを目の当たりにしてきた者にとっては、表層的なとらえ方で違和感を覚えたのは事実です。当時の社会情勢の中で、最善と思われたことをされたこと、しかし、結果として隔離政策の固定化に荷担してしまつた後悔と自責の念は皇族の方々が一番自覚されていることだと思います。

この年は十月十七日に百周年記念式典も開催されております。当日は病を押して寛仁親王が再び臨席され、本省医政局長、青森県副知事、青森市長など、錚錚たる顔ぶれの中で慌ただしく写真撮影などを行つた記憶があります。

華々しい行事も今となつては、ごく限られた職員しか覚えておりません。しかしこれらは入園者にとっては、か細い一筋の光明であり、最終解決などとは、ほど遠いものです。

都道府県のハンセン病協会や藤楓協会の中には解散される動きもあり、入所者の思いまでが風化することのないよう祈りつつ、筆を置きます。

新任のご挨拶



庶務係長 狩野智行

この度、四月一日付をもちまして当園国立療養所松丘保養園に異動になりました狩野智行と申します。どうかよろしくお願ひいたします。

私の出身は、宮城県北部に位置しております「栗原市」です。市町村合併後において、宮城県では面積が一番広い市となつております。秀峰「栗駒山」の麓に広がっている市であり、水がきれいで美味しい米や地酒がたくさんあります。

昭和六十二年に国立療養所東北新生園に採用となり、その後、国立療養所福島病院、国立郡山病院との統合を経て、国立病院機構福島病院、国立病院機構弘前病院、国立病院機構盛岡病院、国立病院機構八雲病院に勤務し、十数年は北東北・北海道の施設勤務をしてきました。最近では、体が北国仕様になつてしまつたようで、出身の宮城県がとても蒸し暑く感じているこの頃です。

趣味は、浅く広く興味のあるものはとりあえず試してみる。という感じです。長く続いているのは、スキーとドライブです。しかし、最近は体力の衰えをひしひしと感じ長い時間の行動ができなくなつております。

初めての勤務地の東北新生園では、長い期間勤務しましたので思い出は多々あります。入所者の皆様は当時三七〇余名いたことを記憶しております。皆様とても元気で野菜作りやゲートボールを楽しんでおられました。当時は入所者の皆様と一緒にソフトボーラーやゲートボールをしたことが強く思い出に残っています。また、里帰り旅行やレクリエーションの付き添いで各地の名所・旧跡や名産品も数多く教えていただきました。転勤先では、各地をドライブする楽しみができ、労せずなじむことができました。

この度、松丘保養園の施設を見せていただき、建物の整備や療養環境がすばらしく整っていることと、皆様の平均年齢をお聞きし、高齢化がすごく進んでいることに驚きを感じました。

機構病院では主に会計の業務をしてきましたので、久しぶりの庶務業務、今回十一年ぶりの国の制度での業務に早く慣れ、微力ですが皆様の療養生活の一端を担えるよう努めて行きたいと思います。今後ともよろしくお願ひいたします。



お久しぶりです

病棟 看護師長 寺 嶋 美由貴

この度、四月一日付けをもちまして独立行政法人国立病院機構八戸病院から転任してまいりました病棟看護師長寺嶋美由貴と申します。

十一年振りに戻つてまいりました。建物は新しくなり正面玄関からの動線が分からずとまどいましたが、自然豊かな環境と樹齢何十年の桜並木は以前にも増してすばらしく、懐かしく感じています。

平成元年に国立療養所松丘保養園に採用となり、二十歳代の私は入所者の皆様に大変お世話になりました。転勤時正面玄関で入所者の皆さんに見送つて頂いたことは今でも感謝しております。松丘保養園を皮切りに独立行政法人国立病院機構花巻病院、独立行政法人国立病院機構弘前病院、独立行政法人国立病院機構八戸病院に勤務してきました。花巻病院では休日に温泉巡りを楽しみ、弘前病院では鍛冶町に出向き、八戸では種差海岸を散策して単身赴任を有意義な生活にする工夫をしていました。

松丘保養園では、朝夕の通勤時に季節の移り変わりを楽しむ事ができます。また季節毎の催し物があり、入園者の皆様と懐メロを口ずさんだり、若き日のことを回想したりと日々一緒に語らい合うことが楽しみです。四月の観桜会は松丘保養園名物の百円ラーメンを久しぶりに食することができるとあって大変楽しみです。楽しみなことばかりなのですが、私も年齢を経たのと同じく、この十年間に入所者の皆様の平均年令は八十四歳とのこと。入所者の皆様一人一人がその人らしく安心して過ごすことができますように一生懸命頑張っていきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

一木一草あれやこれや(5)

— 弥助親方狂想曲 —

滝田十和男

あれは、女性で初のアメリカ駐日大使として、ケネディーさんが着任して、天皇陛下に信任状を奉呈するため、大使館から宮中差し回しの馬車に乗つて行かれるところをテレビに映つていたとき、たまたま居合わせた介護員さんに「むかし私が入院した時も青森駅から、こんな馬車に乗つて来たんだよ」と言つたら「へえー、たいそう優雅なもんじやないの」と驚いていたが、なにが優雅なもんか、こんなに綺麗に飾り立てたもんじやなくて、ひどいボロ馬車だつた。その頃は何たつてバスは青森市街地しか走つてなくて、郊外の新城村の白旗野の間約五キロの道を、乗合馬車がコトコトと往復していたのを、入院患者があるとそれをチャーターして、青森駅から保養院までの4キロの道程を運んでいたのだつた。

私は生まれて初めて乗つた汽車に酔い、ヘトヘトの状態でやつと終点青森駅に着いたと思ったら、今度はガタガタと左右に揺れる馬車の走りに、すっかり疲れ切つていた。一緒にきた父親も大槻ス工さんという老婆もかなり病気が重くなつていたから、その疲れようもひどいものだつた。

馬車は真暗い夜道を進んで、到着したのは午後九時ちかい頃で、バラック建ての重病棟の非常口で木造の階段が五、六段あり、そこを登ると病棟の廊下で、そこから見る室内は真白い布団をかぶつた患者たちが畳の部屋に寝かされていた光景に、ド胆を抜かれたが、夜の廊下はどこも薄暗くて、迎えに出た若い患者の係員に案内されて、治療場の脇から左に折れ、風呂場の前を通つてまたそこを右に回り、炊事場の中を斜めに横切り、そこで一旦戸外に出て、炊

建築中の物品倉庫の組まれた足場の近く、何度も右や左へと折り曲がりながら連れて行かれたのは、今車庫になつてゐる所に、前年の大火でただ一棟焼け残つた「木炭庫」という二階建ての建物の二階の部屋に案内され、夜も遅いからと言うので、着て寝る布団が運び込まれた。その布団には女の人の名前が墨で書かれていたが、その名は一力月ほど前に死亡した人のものだと後で知つた。当時は死亡者の寝具は洗濯して、再生するのが普通だつたのだ。

その夜は布団に入つてからも、隣に布団を並べている患者が、「何処から来たのか」とか、その部屋の状況を教えてくれたりの会話があつたが、道中疲れ切つっていたのですぐに寝入つてしまつた。

翌朝、部屋の隅の細長い飯台で朝食を摂り終わる頃を見計らつて、室長の三浦弥助親方が、火鉢の側の将棋盤に座布団を敷き、その上に胡坐をかくような姿勢で、私たち親子に向かつて、『うつふん』と咳いた。

そこは倉庫の二階だつたため、暖炉が切つてなくて鉄製の四本足の火鉢を利用していた。親方が何で

将棋盤に腰掛けているかというと、背丈が百五十五センチそこの小男なものだから、畳に座つてゐる室員たちと話ををするときはいつもそのスタイルであつた。病型は「結節型」で眉毛も無くて頭髪も皆抜けてしまつていて、ツルツルの頭をしていたのは私の父親も同様であつたが、親方はなかなか気の強い人らしく、話し振りも威丈高だつた。

「お前たち、家から来ると何ぼ錢コ持つてきたバ」といきなり津軽弁で聞かれて、私の父親は「何ぼと言われても……」と言い濶んでいると、親方は畳みかけるように、

「あのはなー、ここでは普通の錢コは遣えねえんだ。院内の通用錢と取換えねばなんねえだ。だから持つてるだけ皆ここさ出してもらねばならねえ、本当は何ぼ持つて來たんだ」と又聞かれて私の父親は、

「六円とあと少しだけだ」と不安そうに答えると、親方は、

「うんだバ、その中から親睦会（自治会）の入会費が一人一円だ、不自由者の相愛会に二十錢を納めて貰わねばなんねえ。二人分で二円と四十錢を納めて来るから、みな一錢残らず出してけろ」

高圧的な親方の言うままに、有り金全部を財布か

ら出して畳の上に並べると、親方は、それを総務の

ところに持つて行くからと、まとめて封筒に入れる
と、二階の部屋から階段を足早に降りていった。

それから一時間ほどして親方から渡されたのは有

り金の半分余りの、今まで見た事も聞いた事もない、

院内通用銭というものであった。

その頃は一室に十六人が居たのだが、夜になると
その半分ほどの男たちが居なくなるのだつた。それ
は妻帯している人はみな夕食に配られた、飯盛り丼
を抱えて細君の部屋へと、行つてしまふからだ。親
方もその一人で、だいぶ年齢の離れた、若いヤエコ
という女を妻にしていた。ヤエコは昼間にときどき
親方の部屋に姿を見せて部屋の若い男たちと雑談を
交わしたりしていたが、親方はあまりそれを喜ばな
いふうでもあつた。

大人ばかりのその部屋には私より一歳上の柴崎繁
二郎が居た。繁二郎は、私が初めて中條院長の診察

を受けるために治療場にゆくのも、風呂場や売店に
行く道順も、みな快く案内してくれて、それで私は

院内の様子に少しづつ、慣れていったのであつた。

その繁二郎もその後二年ほどして退院して陸軍志願
兵として満州の部隊に入隊したが、沖縄の戦場に転

属され、そこで戦死してしまつた。

あれほど軍隊に入るのを夢みていた彼がどんな状
況のもとに最後を遂げたのか知る由もないが、いつ
も私の記憶の中に消えることはない。

院内のあちこちを歩き回つてゐるうち、わたし
も田舎育ちだから、野外で遊ぶのが好きであつた。
ちょうど私と同じ年齢の菊池真男が、戸外での遊び
に誘つてくれた。真男は火葬場近くの細い流れにザ
リカニが生息しているのを知つていて、そこへ初め
て私を連れて行つた。私は生まれて初めてザリカニ
というのを見たので、とても珍しかつた。目の前の
大きな沼にはカラス貝が岸辺の泥の中に見られだし、
河鹿がうようよと泳いで居るのが見えた。水が綺麗
だつたからだらうが、河鹿などは素手で掬つて何尾
も掴まえることが出来た。私は缶詰の空カンに掴ま
えた河鹿を何尾か入れて、部屋に自慢気に持ち帰つ
た。

ところが、それを見た部屋の弥助親方が、烈火の
如く怒り出した。

「こちらア、ナニ獲つて来たんだ、この童ア、何ん
だり、かんだり獲つてくるもんでねえ、ここは病院
なんだぞ。そんな物獲つてきて、人さ迷惑かかるん

「じゃねえがあ」と、いきなり雷を落とされた。内心子供が野遊びして河鹿数尾くらい獲つて来たからと言つて、そんなに怒ることはあるまいと思つたが、私は黙つてまた沼に降りてゆき、河鹿を水辺にもどしてやつた。

それから数日した或る日、部屋の人に頼まれて商店に買い物にやらされた帰りに、いつも通る炊事場の北口から出て新築中の被服倉庫の足場を組んだ通り角に差し掛かると、リンゴを木箱に盛りあげて積んだ荷車を曳いた近郊の親父が、水溜まりに嵌まり込んで動けずに居た。

「兄ちよ、済まないがうしろから押して手伝つてけろ」と頼むので、私は新品の靴が泥に汚れるのも構わず、ぬかるみから荷車が脱け出すまで懸命に後を押してやつたら、やつと脱出できた。

つい目と鼻の先の商店にリンゴを納めに来たのだという。親父は大変よろこんで、積み荷の中から赤ん坊の頭ほどもある大きな、紅玉という真赤なリンゴを私に六コも呉れた。それを両腕に抱えて部屋に戻つたら、まるでそれを待つてたかのように、弥助親方は毛の無い頭に湯気を立てて怒つた。

「この野郎どこから、それを盗んで来た。泥棒す

る奴なんて此処に置いておく訳にやゆかねえ。とつとと、この部屋から出て行つて貰おう」

私は「いま其処で、リンゴ屋の荷車を押して手伝つたら、お礼だと言つて呉れたんだ」と説明しても、親方は「リンゴを六コも只で呉れる人がある訳ねえ」とあくまでも、怒りを納める気配が無い。

その当時は東側の境界から直ぐ手を伸ばせば届きそうな近郊一帯は、リンゴ畠がひろがつていたから、盜難の苦情が聞かれていた事も事実なので、弥助親方がてつきり早合点して怒り出すのも分からぬ訳ではなかつたが、怒られる側としては堪つたものではない。

腑におちない弥助親方は何も言わず外へ飛び出して行つたが、すぐ戻つて来て「商店にお前の言うリンゴ屋がまだ居たから、訳を聞いて来た」と言つて、私の言う事が本当だと分かつてくれて、この騒ぎはようやく一件落着とはなつたが、一時は部屋の人達も色めき立ち、弥助親方の剣幕に私も肝を冷やした事は事実だつた。

そんな事があつてから数日後のこと、私が将棋盤を机代わりにして、故郷へ手紙を書いていたときだ。弥助親方がうしろから覗きこんで「おめえ仲々良い

字を書くんじやねえか」と初めて褒めてくれた。

そして外の用足しに出掛けるときは、よく私を呼ぶつけて、一緒に連れて歩きたがるようになつた。背丈が弥助親方より少し低い、十二歳の子供なら劣等感もなく一緒に連れ立つて歩けるとでも思つたか、大宮御所から御下賜になつた百五十本の楓の苗木を成育床に囲い、大切に管理しているのも弥助親方の役目としていたから、私に草取り鎌など持たせて連れて行くのだつた。

或るときは、お正月にまだだいぶ間があるというのに、「総務さんへお歳暮を届けに行くから手伝え」と言うので従いて行つたら、売店で蜜柑三キロほど入つた木の箱入を買つてそれを私に提げさせ、売店から廊下伝いに行くとすぐ近くなのに、二田総務の部屋まで届けに行つた。そしたら女人人が「そこに置いてつて」と、言うから挨拶もそこそこに帰つて來たが、帰る途々弥助親方は、「あれはなア、届けだ」と教えてくれた。なんでも全部で三十五室ある室長のそれぞれが、歳末にはミカン箱でのお歳暮を届けるのが昔からの通例になつてゐるといふのだ。

「なんでえ、昨日、今日來たばかりの新米患者のた蜜柑は、すぐ売店に回されて、又売り出されて繰り返し売店で売られるのよ、だから早い方が好いん置いてつて」と、言うから挨拶もそこそこに帰つた。

「いきなり伊藤さんに肩入れしての理屈を並べ始めた。私の父は「家に残して來た、まだちいさい子供達に、送つてやろうと思つたもんだから……」と釈明

年末ともなると、各室長が総務の部屋に呼び集められて慰問品の配分があつた。弥助親方は絣の木綿反物一反を貰つて帰つて來た。その反物を巡つて一波乱起きたのだった。その当時は木綿一反は、市価にすれば一円四十銭くらいしたものであつた。それを入札にして錢に替え、お正月に部屋の皆でお茶菓子代にしようと話が決まり、弥助親方の前に、反物と入札箱がしつらえられた。そして銘々が札を入れ終つたところで箱の蓋を開けたら、何と私の父と、函館から來た船乗り上りがりの伊藤さんと、付け値が共に偶然にも七十五銭で最高額であつた。そこで皆が囁き立てて、ジャンケンで決めようととなつた。そして二人が前に出てジャンケンをした処、私の父が勝つてしまつた。悔しがつた伊藤さんが、頭を搔き搔き引つこもうとしたそのときだ。とつぜん弥助親方が、「待つた！」と掛けた。

しても、弥助親方は伊藤さんへ反物を取らせたくての横槍を入れたのだ。伊藤さんは部屋の中ではいちばん裕福で、家から仕送りも来て、日頃から弥助親

方の女房やエコに洗濯をして貰い、いつも身綺麗にしていて、親方にも何かと付け届けをしていた。そんな関係での身びいきが効を奏して、反物は伊藤さんの手に落ちたのであつた。

弥助親方の言う事は室員に絶対の権威を見せていたのはこの辺りまでで、年の暮れ辺りから雪はしんと激しく降るなかでも、大晦日と元日は、それなりに何となく浮き浮きした気分で迎えたのであつたが、二日目の午後のことである。彼、弥助親方にとんでもない災難が降りかかる事と相成った。足音も荒々しく階下の階段を上つて来た一人の男が、弥助親方の近くまで来ると「ヤヤヤヤヤヤ弥助、コココココこの野郎 ワワワワ（私）のこと、ナナナナんて思つてんだ。ブブブ殺してやるガ！」と片膝立てて座ると、懷から短刀を取り出して鞘を払うと、ブスリと畳に突き差した。

それまで火鉢を囲んで、四方山話に花を咲かせていた部屋の人たちも一斉に緊張が走つた。

『トトト歳取り（大晦日）に、ワ（私）ば、ヨヨ

ヨ招ばねえのは、イイイ一体ナナナ何の訳アアアあるんだ！』と弥助親方に詰め寄つた。

その男は三十歳くらいの見るからに凄味を利かせているが、弥助親方の細君やエコの兄で、佐々木恵一という男だが、どうした事が大晦日の晩の祝いの席に身内なのに招待しなかつたらしい。それを憤慨して乗り込んで来たと言う訳なのだが、ひどい吃りで、興奮すると益々吃りが強くなつて件の修羅場とは相成つた訳だが、その間、弥助親方は横に顔をそむけたまま、ひとつ言も言葉を発せず沈黙を守つていた。

そばに居た部屋の人たちが取りなして大事にならずに引き取つて貰つたが、一時はどうなるものかと私は隅の方で震えあがつていた。

当時の園内では肉親は勿論、親子のように仲良くなつた人々が、寄り合つて歳越しの祝いをするのが通例で、弥助親方はヤエコの部屋で兄妹なのに兄を招ばずに、小じんまりと二人きりで歳越しの膳を囲んだらしいのだ。ヤエコの兄の怒ることも分からぬ訳ではないが、そんな騒動があつた正月も過ぎて、雪の中でも工事が進められていた新療舎が完成し各室ともに、引越しの手筈が進められていた。

一昨年十月の大火灾のあとバラツク住まいをしてきた人々に、いよいよ新築寮舎への入居が認められたのだ。

その年は雪が特別に多かつた冬だったが、私たち親子は今まで居た木炭庫から南へ二百米ほどの梅華寮の二号室へ移された。作業に出る人は一号室で、弥助親方はその部屋の室長で、われわれとは隣室に分けられたのだ。二号室は不自由者ばかりだったので、三号室の柳田さんが二号室の室長も兼ねることで、私たち親子は弥助親方の手から離れることになったのだ。だがすぐ隣室の距離に居るので、今まで同様に接して呉れてはいた。

梅華寮は何もかも新しく、用材のヒバの木の香りがとても気分が良かつた。

引越してから二週間ほどした夕暮れも迫つた頃の事だ。一号室から四号室まで貫き通しの長い廊下で、東の四号室の方の玄関から俄かにあわただしい足音がして、誰かが大きな声で「ヤエコが逃げた！ 阿部床と一緒にだ！」と叫びながら走つて来た。一号の弥助親方に知らせる為であろう。

それぞれの部屋から皆首を出して、何事が起つたのか不審に思つてどよめき出した。

私は何の騒ぎか理解できずに廊下に出てみると、弥助親方が血相変えて押し入れの中から短刀を取り出して、それを懷に差し込むと足音も荒々しく雪の降る外へ飛び出て行つた。それはまるで映画の一シーンを見ているかのようだつた。

後から追いかけた人の話を聞くと、弥助親方が一キロ半ほど離れた津軽新城駅のホームに駆け付けたとき、上りの汽車が入つてきて逃げた二人はそれに乗ろうとしていた。弥助親方は何か喚きながら短刀を振り回して二人を追い回して襲いかかり、ヤエコは何とか取り押さえたが、男の阿部床の方は逃げ切つて発車間際に乗車することが出来たものの、次の停車駅の鶴ヶ坂駅で強制的に降ろされて戻つて來た。院内はときならぬ逃走事件と新城駅頭での活劇に、話題は持ち切りとなつた。

弥助親方は自分の女房の仕出かした事件に、途方に暮れた風で見るも氣の毒でならなかつた。

逃げた男の方の阿部床は、早速、最高幹部たちから厳しい折檻を受けたうえ、追放処分となつて三日後には姿を消してしまつた。

なぜ「阿部床」と言うのか聞いたたら、彼は手先が器用で理髪部で働いていたからだという。

弥助親方は、津軽新城駅頭であんな前代未聞の大活劇を演じてしまつたからには、とても今迄のよう人々との付き合いも出来ないと思つたものか、夫婦して東京の目黒区にある私設の慰廃院に行くと言い出して転院の願いを出した。

それが叶えられて、まだ二月のいちばん雪の降る日に、行李に身の回りの物を詰めてそれを背負い出て行つた弥助親方のうしろ姿は、背丈が低い人だけに、背にした行李ばかりが目に残るほどだった。

「やつぱり行つてしまつたか。今まで人から煙たがられていても、いざ居なくなると、何となく寂しい氣もするなー」なんて、部屋の炉端談義の噂ばなしに人々は、話題の種に困るような事は無かつた。

弥助親方らが慰廃院にたどり着いて一ヶ月ほどしてからだ。そろそろ慰廃院の生活にも慣れて來た

頃だろうと話し合つていた席に、こんどは妻のヤエコが別の新しい男をつくつて慰廃院を飛び出して岡山の長島愛生園に逃げた、という情報が流れてきた。もともと弥助親方とヤエコとはだいぶ齢も離れていたし、病気の程度だつてヤエコの方がぐーんと軽症だつたから、どう比べてみても不釣り合いな夫婦だつたのだろう。

それから六年が過ぎた昭和十八年の春、私が保養院を脱院して勤めていた岩手県の釜石製鉄所から体調を崩して働けなくなり、宮城県の東北新生園に入園して、収容された独身寮の第四病棟の三号室に落ち着いたら、その同じ棟の一號室にかつて慰廃院に行つた筈の弥助親方が居るではないか。戦争が激しくなり東京の「慰廃院」が解散されたので知古の鈴木園長を頼つて来たらしく、早速挨拶に行くと『お前え、何年か見ねえ間にずいぶんとでかくなつたなア』と、私を見あげるようにして、迎えてくれた。あの青森の当時に肩を怒らせて闊歩していた弥助親方は、また一段と体が小さくなつたように見え、別人のように穏やかな風貌に変わつっていた。

注）弥助親方は青森県出身。「甲田の裾」には短歌を三浦登仙、川柳を三浦一滴のペンネームで盛んに発表している。

弟

三 潟 喜美子

昭和十一年三月二日生まれの、末っ子の弟について
パンを取りました。

平成十一年八月十一日六十三歳五ヶ月で亡くなりま
したが、あまりにも思い出多き弟でした。

前にも記しましたが、母は第一子より一滴の乳も出
ず、産後の休みが終わると子供を祖母に預けて早朝よ
り夕方まで、男同様に働きました。六人目まで安産
だったのに七人目も安産と、母一人で決めつけていた
様でした。真冬に男同様に働こうとした為、祖母が止
めて体を大事にと、叱られたようです。母三十九歳で
した。

お産が始まりましたが、二日たつても生まれず、産

婆さんがお手上げで病院に行く支度をしていたところ、
やつと生まれたのです。大望の男の子、皆大喜びでし
た。その喜びようは異常でした。私は小学三年生の三

学期でしたが、子供ながらもはつきり覚えております。
どうして男子だと、こんなにも喜ぶのか、不思議に
思つたのです。後でわかつた事ですが、女五人の後の
男子だつたので、特別だつたのかなー、と思います。

その喜びの中、母が高熱を出し、これまた大騒ぎと
なり、すぐ病院へと行きました。弟は少し小さく生ま
れたので、祖母の手には負えず、乳の出る方を産婆さ
んにお願いしたところ、思いの外早く見つかり、一年
間お世話になる事になりましたが、私達姉妹はがつか
りしました。その家は、学校のすぐそばの農家でした。
姉と私は、学校の帰りに弟を見に寄りました。眠つて
いる時もあり、遊んでいる時もありました。

一年後、連れて来た所、火が付いた様に泣き、何も
食べず困りました。仕方なく、もう一年お願いしまし
た。また、皆がつかりしました。

今度は、家族が時々顔を出し、弟に覚えて貰う事にしました。二年後に帰つて来た時は、少し泣きましたが、すぐ祖母に懐いてそばを離れず、食事、寝るのも一緒でした。母は悔しい思いをした事でしょう。

母は退院後も無理は出来なくなりました。父は森林組合に勤めておりましたが、その職を辞めて百姓に専念することになりました。当時家には若い男性二人が住み込みで居ました。兄は高等科を終え、家の仕事をしていましたので、母は安心して、気分の良い時には、畠仕事をしていました。

姉も私も学校から帰る早々、家の手伝いを一生懸命しました。兄と弟の年の差は十八もありましたので、弟が小学校二年の時は、おじさんになつていきました。

高校卒業と同時に上京し就職した弟でした。

その会社を三年程で退職し、別の会社に勤めました。その時、下宿の大家さんの奥さんの従姉妹とお見合いし、お互いに気が合い、弟はその娘さんの実家（新潟）にも行き、話は順調に進み、昭和三十七年十一月中旬結婚する事になりました。

この年の三月に実家に二人で来てくれて、両親も喜

びましたが、六月に父が亡くなりました。しかし式は予定通り行わされました。

私はこの年の九月上旬退園出来ました。

実家で農作業を手伝い、十月中旬上京、結婚する予定になつておりました。弟が結婚の事で母、兄に相談の為帰つて來ました。その時弟に、私が上京し結婚することになつたので、よろしくと言つたところ、弟から思いもよらぬ言葉が返つてきて、私は啞然とすると同時にムカツときました。

これが姉に対して言う言葉か、否、退園したとは言つても悪病名は消えることはないのか？一生背負つて生きて行く事なのか？

弟の言葉で感じました。私はわかりました。

「今日より、お前とは兄弟の縁を切る。決して我家には来ないで欲しい。私も行く積もりは毛頭ないから」と強く言いました。

私は上京する時、母にこのことを話した所、驚いて、「弟をわがままに育ててしまつた。弟は自分の結婚の事で頭が一杯だつたのだ、許してやつてくれ。」と言われ、又腹が立つた。あの言葉は決して忘れない。

一生許さない。私の住所を弟には決して教えない。

でと、強く母に念押しして、上京しました。

私が松丘保養園に入園して以来、母は時々手紙をくれました。決して上手な字ではなかつたですが、嬉しかつたものです。忙しい所、又眠い所、本当に感謝しました。上京しても手紙が来ました。弟の結婚式には、兄姉三人が出席したとの事で、母は父の死から五ヶ月

しか経つていなかつたので、欠席したとの事でした。

すぐ下の妹も九月に連れ合いを亡くしており、欠席のことでした。

母より、「弟が私の住所を聞いてきた時に、私に決して教えるなと言われた。お前は取り返しのつかない事をした。謝るように言つたところ、弟は『申し訳のない事をした。』と言つていた。今すぐとはいわないが許してやつてくれ」との手紙が届き、私は又腹が立つた。

ハンセン病になつた人でないと解らない苦しみ、悲しみ、残された家族の方々も並々ならぬ苦労があつた事でしようが、病になつた本人が一番辛いのです。

私は甥、姪達が結婚する迄に退園出来たらと必死に治療しました。退園出来た時は一生一代、最高の喜びでした。言葉には表す事が出来ないほどです。

村の神社に退園の記念に賽銭箱を奉納しました。あれから五十三年の月日が経ちました。昨年帰郷の折に神社に行きました、あの賽銭箱が汚れておりましたので、甥に頼んでニスを塗つてくれる様にお願いして来ました所、早速綺麗になつた所を写真に収めて送つてくれました。感謝の念で一杯です。

予定通り私は、昭和三十七年十月中旬上京し、第二の人生が始まりました。

年が明けて四月頃より主人の仕事が少しづつ忙しくなつてきました。五月のある日曜日、主人の仕事を手伝つて夕方帰つたところ、郵便受けに弟よりのメモが入つっていました。私は驚きました。

「用があつて来ました、連絡ください」と。

主人には弟の事は話していませんでしたが、全部話して、決して連絡しないようにと言つて、夕食の買い物に出掛けた所、主人が電話をしてしまつたのです。

弟は今家を新築しており、どうしてもお金が足りず、貸して欲しいとの事で、貸すことになりました。

私は呆れて主人と喧嘩になりました。主人には、自分の金を貸すのだからと言われ、又腹が立つてきまし

た。

一週間後、弟が家に来るとの事。私は外出しました。夫婦でお昼頃来たので、寿司を食べたそうです。弟のお嫁さんがお前に宜しくと帰った。美味しいお菓子も貰つたから食べる様に言わされましたが、一口も口にしませんでした。

十一月上旬、新築祝いの招待状が来ました。私は無視しました。

それから一年がたつた頃、弟は会社を辞めて独立したとの事を、母が亡くなつた後は兄が手紙を寄越していましたので知りました。勿論弟の事も、私が頼んだ訳で

もないのに筆まめの兄は知らせてくれました。

古い家を借りて改造し、事務所、食堂との事でした。奥さんの第二人、妹も上京して來たとの事、弟は甥四人を十一月～三月一杯迄仕事に來て貰つたということでしたが、人手が足りず、独身者に夕食付きという条件で募集したところ集まつたそうです。

会社は順調で、六世帯のアパートを建てたとの事で、

兄も驚いたと、手紙がきていました。

それから何年たつたか、今度は三階建てを新築したこと。一階は事務所と物置、二階は自分達の住居、

三階は独身向けのアパート。そのお祝いを盛大に行うから、私達にも出席して欲しいと招待状が届きました。そのお祝いの前日、兄が私の家に來たのには驚きました。私達を一緒に祝いに連れて來てくれと弟に頼まれたそうで、二度驚きました。

その晩は、兄とゆっくり話をしました。

兄に、自分の顔を立ててくれと言われ、主人と二人出席することにしました。兄には負けました。

兄曰く、明日のお酒も美味しいだろうが、今晚のお酒は特に美味しい、と言つてくれたので、嬉しかつたです。

弟の家に着いた時には、姉妹、甥、姪それに二歳まで弟が乳を貰つた夫婦も来ていました。楽しい賑やかな宴席でした。盛大な新築祝いでした。

次の日は車で東京の名所を廻り、ホテルでの昼食でした。大変なもてなしで、夢見心地で帰路に着きました。

ある日、弟から連絡があり、兄弟でお伊勢参りに行くことになつたので、私にも一緒にどうかと誘われました。私は二度もお詣りしているからと断りました。

兄弟揃つての旅行は最初で最後になるかもと言われましたが、断りました。ところが、姉、妹達から一緒に何度も連絡があり、同行することになつたのです。

当日、東京駅に集合です。皆これから無錢旅行だと大喜びしていました。ホテル、往復の切符、弟が全部揃えたのです。新幹線の中、女五人ともなれば、賑やかな事。食べたり、飲んだり、弟が全部買つてくれたので一層美味しかつたです。

参拝を終え、お土産店で各自発送したり、ゆつくり店を見て廻つてると、素敵な財布が目に止まりました。当時ビーズが流行していました。弟がみんなに買ってやるからと言うので、大喜びで買つて貰いました。私はその財布を今でも大切に持つております。

また、ブラウスも一着ずつ買つて貰い、大はしやぎでした。

弟には、「ホテルに入る時は上品に」と言わされました

が、部屋に入ると同時にまた賑やかに、皆大笑いでしました。

夕食も美味しかつたこと！一生の思い出になりました。

次の日はタクシーで鳥羽の方を見物し、東京駅に着

いた時は夕方でした。私は皆と別れて帰り、姉妹達は弟の家に泊まり次の日帰りました。

弟の嫁さんの妹は従業員の方と結婚し、妹は姉の片腕となり、その夫は副社長として弟を助けてくれました。弟はそのお礼として、家を建ててあげました。二階はアパート、一階は住まいとしたのは妹夫婦の希望だつたそうです。私も見学に行きました。

その後、弟はまた自分達の住まい建てました。大きい家で池もあり錦鯉も泳いでいました。前に建てた三階建ての家は次男に、長男には二階建てを建てました。長女には嫁に行つても遠くに行かぬよう、近くに家を建て、次から次とよく建てたと感心しました。

同級会には毎年出席し、二次会は弟が御馳走したとの事。実家にも泊まり、姉妹達四人分と義姉の計五人分として一泊温泉旅行のお金渡したのも二十年も続いたとの事でした。

村の神社には獅子頭を奉納しました。大晦日の晩には若者達が各家々を廻り、お酒やお餅等頂き、神社は夜明けまで賑わつたものです。

弟は近くのお寺に自分達のお墓を建てました。御影石の立派なお墓でした。元気な内にすべて成し遂げた

のです。

独立して始めた仕事は、外国から入った石綿の吹き付けの仕事でした。当時は大変忙しく、その波に上手に乗る事が出来ました。大学も出ていないのに頑張り、並々ならぬ努力をした事でしよう。父が結婚が決まつたと同時に亡くなり、母も一年後に亡くなり、親孝行も出来なかつたので、私達姉妹にその分出来る事をしようと思つたのでしよう。

弟は平成十一年三月胃ガンの手術をしました。肝ガンでもあつたのです。東京都板橋区の日大病院に入院

した時弟より、時々見舞いに来て欲しいと頼まれました。前に私に酷い事を言つたので見舞いに来ないので、と心配になつたのでしよう。

少しは反省していたのでしょうか・・・

五月に退院した時は、すっかり痩せて、以前の元気な姿は見る影もなかつたです。

嫁さんより、前に頂いたスズコを主人が食べたいと言つてゐるからお願ひしますと連絡があり、早速青森市の市場より取り寄せました。

届けに行つて玄関に入ると、弟は「お前は元氣でいいなー」

弱音を吐いたのを聞いた事がなかつたので、驚きました。

「スズコを食べて元気になつて！」と言うと、目に光るもののが見えました。

その年の六月中旬姉妹、甥、姪の六人で弟の見舞いに上京してくることになりました。弟は大変喜びました。お嫁さんより、田舎の方々を私の家に泊めてやつて欲しいと頼まれ、どうしてと聞いた所、家に泊めると弟が気を使い疲れるからと聞いて、私は快く引き受けました。

田舎の人達の上京の前日、弟より連絡があり、

「明日は早く、十時頃には着くように。着いたら（私に）そばに座つてくれ。渡したいものがあるから、すぐバッグに入れる様に。誰にも気付かれない様に」と。

お嫁さんが買い物に出てるうちにコツソリと電話しきつたようでした。

次の日は朝食を早めに済ませ、十時前には到着しました。喜んで迎えてくれました。弟は着物を着込み、少しでも恰幅良く見せようと必死でしたが、顔は隠しがありました。

ゆっくりお茶を飲んだり、話に花が咲き賑やかに過ぎない

ごし、お昼は立派なお膳を用意してくれておりました。四時頃帰ると申し出ると、今は一番日が長い季節、もう一時間居てくれと言わされました。これが最後の別れと思っている、と。

私達もそう思つていきました。帰る時、お嫁さんが、途中で夕食でも食べてと、お金を渡してくれました。あの時ほど、別れが辛かつたことはありませんでした。

家に帰り、弟よりの包みの話をした所、誰一人気付いていなかつたそうです。包みの中には、お金が八十万円入つており、一人十万円ずつ、私の主人にも十万円とのメモが入つっていました。驚いたり、喜んだり忙しい一日でした。

田舎の方達が帰つて間もなく、同級生十五人程見舞いに来ると、お嫁さんより連絡がありました。

夜行バスで来て、夜行バスで帰ること。弟の家にはお昼頃着くので、私に手伝いに来て欲しいとのことでした。

同級生は弟の体を気遣い、昼食後帰ると言つたが、弟は離しませんでした。先日私達親族と会つた時とはまるで別人のようでした。話に花が咲き、楽しくて嬉しいくて仕方のないようでした。決して無理しているよ

うには見えませんでした。同級生の偉大な力を感じました。兄弟には見せない一面を見たようでした。十五名の中に女性二人がいて、手伝つてくれました。残つた方々の寄せ書きを見て、思わず涙がこぼれました。弟は良き同級生に恵まれ幸せだと。私と弟は九歳違いますので、皆さんを見て元気と生きる力を貰いました。

この年の八月十一日、弟は亡くなりました。

良く働き、良く遊び、太く、短い人生だつたと、私は思っています。

十八、九年前より石綿工事に関わった方々が肺ガンになり亡くなる人が急増していると、テレビ、新聞等で騒がれ始めました。妹が、弟もそれで亡くなつたのではないかと言われ、私も同じ考えでした。前に弟の所で働いていた甥達が病院で診て貰つた所、大丈夫だつたようで、昨年の私の米寿のお祝いにも出席してくれて、六十歳を過ぎても元気で働いております。

私は弟に謝つて貰えなかつたですが、兄の取り計らいで許した形となりました。私もいつまでも意地を張らず、これで「よし」と思つております。

主の家にわたしは帰り

— 安本赫道さん追悼 —

金 美 淑

1. 遠足

私たちには『遠足』という子供の頃の楽しい思い出があります。昔は徒步で遠くまで出かけ、自然を観察、友達との連帯感を持つ大事な機会でした。韓国語で遠足という言葉は消えるという『消』と風の『風』という字を合わせて『消風』(ソブン)と言います。元々の意味は「風に当たる」という意味で、気分転換や頭を冷やすために外に出て風に当たることを言います。

日帰り程度の旅行ですが、私は当日の天気が気になつて眼れなかつたことや、母がどんなお弁当を作ってくれるか楽しみにしながら、新しく買ってもらつた服を枕の上にし、わくわくしながら待つていだ覚えがあります。小学生の時、全校生が千人以上の大きい学校だったので全員が集まる場所を探すのも大変だったのでしよう。一時間程度の距離を子供たちと親たち、物売りの人々が大軍團になって貯水池の下にある平地や

広くて平原なところがある山に向かつて歩いて行きました。

遠足に行つて楽しかつたことは幸運の君子が押された紙を探し、物と交換する「宝探し」というゲームと隠し芸として個人技を發揮する時間でした。また遠足の場所にはいろんな物売りが商売に来てるのでおいしいものを買って食べるのも最高の楽しみでした。勉強や試験から解放され、その日だけは自然が先生であり、友達であり、教科書がありました。固い机を離れ、自然の芝生で寝ころび、友達と思いつきり笑い、しゃべり、おいしいものをたくさん食べられる第二の誕生日のような日でした。

2. 千祥炳の詩「帰天」

韓国の現代詩人の中に千祥炳(チヨンサンビョン一九三〇～一九九三)という人がいます。「韓国文壇最

後の奇人」、「純粹な無欲の詩人」とも呼ばれた千祥炳は貧しかつた暮らしにも関わらず、いつも屈託のない笑顔を見せる詩人でした。千祥炳は代表作とされる

「帰天 クイチョン」で、この世は美しく、人生は遠足だと表現しています。

その詩の最後の部分を足らぬ自分の訳で紹介させていただきます。

我、天に帰る

美しきこの世の遠足が終わる日
天に帰り、美しかつたと言おう…

帰天という言葉はキリスト教で言う召天に当たる力トリック教の用語で、人が亡くなることを言います。

彼は人が恐れるはずの『死』というものを自分の根拠は天にあり、そこからこの世に遠足に出て、家に帰ること、つまり人間の『死』はこの世で過ごした遠足の一番、美しい最後の瞬間に例えています。

しかし力トリック信者であつた彼の人生はけつして美しき遠足ではありませんでした。詩人千祥炳は一九三〇年、日本の兵庫県姫路市で生まれました。彼が祖国に帰ってきたのは、韓国が植民支配から解放さ

れた一九四五年、中学二年の時でした。早くから文學的才能を認められていた千祥炳は中学3年生の時、教師や詩人の推薦で文芸誌に「川」という詩を掲載しています。

その後、彼はソウル大学商科大学に入学しますが、文学をあきらめることができず、大学を中退し一九六五年、「カモメ」という作品で詩人としてデビューしました。一九六七年、ドイツやフランスに渡った多くの留学生や海外同胞が北朝鮮のスパイとして活動をしていると疑われた「東ベルリンスパイ団事件」に巻き込まれた千祥炳は、六ヶ月にわたつて投獄されました。

拷問の後遺症に悩まされ、あてどもなくさまよつていた千祥炳は一九七〇年のある日、ふつと姿を消します。友人や知人は彼を探すために手を尽くしましたが、翌年の春になるまで千祥炳は見つかりませんでした。千祥炳が死んだと思った友人たちは彼の作品六〇首あまりを集めて最初の詩集であり、遺稿詩集「鳥」を発行しました。

ところが、千祥炳は死んでいませんでした。街中で倒れているのを発見された彼は浮浪者に間違えられ精神科の病院に収容されていたのです。詩集が発表されて間もなく、千祥炳は特有の笑みを浮かべて友人の前

に現れました。こうして彼は生きていながら遺稿詩集を出した唯一の詩人になりました。

詩人としての千祥炳は、決してハンサムとはいえない容姿でしたが、誰にも負けないくらい美しい詩を書いた詩人でした。私は今日、千祥炳の「帰天 クイ チヨン」という詩に現れている美しい死に方をして亡くなられたお一人の方を紹介したいと思います。

3. 安本さんのこと

去年、私は石江にある松丘保養園に四回、『遠足』に行きました。松丘保養園は皆さんもご存知の通り、日本では最北端のハンセン病療養所として一九〇七年に始まつたハンセン病隔離政策により一九〇九年創立され、今年で一〇六年目が経過しています。長年にわたりて偏見、差別、人権侵害を受け苦難の人生を歩んでこられた入所者たちはハンセン病をすべて治療し、未消神経麻痺や視覚障害などの後遺症、高齢による合併症を持ちながらも元気に暮らしています。

私は去年一月に韓国から来た教え子と娘を連れて川西先生の部屋を訪ねました。その時、先生は保養園には在日の方が一人いるから「会つてみませんか?」と誘つてくれました。それが私と安本赫道（本名・權赫

道クオンヒョクド）さんとの初めての出会いです。私たち廊下で立つたまま話しましたが、とても明朗な声と平穏なお顔でした。背は低く、色の入った眼鏡をかけて半月の目で笑つている姿はどうてい療養者は思えませんでした。保養園という制限されたところで、同じ韓国人に会えるとは! そう思つたらどうでしょうか。安本さんとの出会いは、ほかの人とは違う安本さんの人生そのものが私に突然、迫つて現れた圧倒的な出会いでした。

後になつて分かつた安本さんことを少し話させていただきたいと思います。安本さんは一九一九年、私と同じ出生地、韓国の慶州（キヨンジュ）で生まれました。お父さんは戦争中、強制連行され日本の炭鉱で働いていました。安本さんも貧乏のどん底で日本に来ればご飯が食べられるという思いでお母さんを韓国に残し、新潟へ密航船で來ました。

安本さんは石川の繊維工場で働き、ハンセン病が発症し松丘保養園へ一九四四年入所します。（当時二十四歳）入所後は仕事をされながら日本の文字を覚えました。お兄さんも韓国に妻と息子（權宅俊クオンテチユン、以下權さんと称する）を残して日本に來ました。

安本さんは入所から十年後、洗礼を受け、クリス

チヤンとなります。聖書には振り仮名がふつてあるため聖書を読み文字を覚えられたことも信仰へと導かれときつかけになつたと語つていました。療友の間で

「奉仕と感謝の人」と呼ばれた安本さんは敷地内の掃除や教会の会堂掃除を率先してしたり、弱い人を負ふつて礼拝をしていたり教会のことにつき一生懸命奉仕をしました。

安本さんが逸見ツネさんという方と園内結婚をする一年前、お兄さんもハンセン病になつて入所しました。お兄さんは一九八〇年、六十一歳に保養園で亡くなりました。安本さんはお兄さんの妻と子供を韓国の牧師

さんに探してもらい、ロサンゼルスにいることが分かりました。お兄さんの妻と息子は、ハンセン病だつたことや亡くなつたことを知りませんでした。一九九五年二人は保養園に来園したことがあり、二〇〇〇年五月から一ヶ月間、安本さんはお兄さんの息子（権さん）が住んでいるロサンゼルスや韓国の旅行に出かけました。

しかし二〇〇五年十二月二十九日、とてもいい奥さんだつた逸見ツネさんが亡くなりました。その後、安本さんは毎日三回必ず「家内がいるから」と言つて納骨堂に行きました。奥さんが亡くなつてから安本さん

は唯一の親族である権さんを年に一回はアメリカから來てもらい、楽しい時間を過ごしました。権さんも自分のお父さんの遺骨が納骨堂にあつたためアメリカから毎年、安本さんに会いに来ました。

二〇〇六年から安本さんには慢性硬膜下血腫の症状が現れ、もの忘れすることも現れました。去年五月は教会前で転倒して骨折、九十四歳の高齢にもかかわらず、手術の経過はよく回復しつつありました。が九月十四日から多量の消化管出血と黄疸症状が出、九月二十日、胆囊癌で亡くなりました。

4. 主の家にわたしは帰り

私は川西先生に言われて去年六月十四日、アメリカから権さんが来たとき、安本さんの病状や手術に関して韓国語で説明をするため、二回目、保養園を訪ねました。それをきっかけに権さんや北海道在住の安本さんの奥さんの弟さんご夫妻、それから毎日病棟に足を運び、安本さんの世話をしていた坂本栄子さんとの出会いもできました。安本さんが家族と看護婦さんに囲まれ、歌つたり笑つたりしている姿はお天気の下、芝生の上で遠足を楽しんでいる子供のように見えました。権さんからもアメリカでの苦労話や祖国への切ない思

いをした経験、ハンセン病で亡くなつたお父さんの話を
などを聞かせてもらいました。

安本さんが去年の八月七日、胆嚢癌の疑いで体が急速に悪化、アメリカから権さんが駆けつけてきたので私は三回目、保養園へ行きました。私が最後の四回目に、保養園へ行つたのは安本さんがなくなる前の日（臨終十一時間半前、午後三時ごろ）、去年九月十九日のことです。

その時はもう呼吸が苦しく口は何か言おうと一生懸命動かしていましたが、言葉にならず、かすかな唸り声だけが聞こえていました。私は安本さんの耳元で大きい声で聖書の詩編23篇を読んであげました。でも本当に不思議なことに聖書を読み聞かせている間は安本さんの呼吸が静まり、穏やかな顔になつていきました。それは主の御声に耳を傾けている主の御許により近づこうとする崇高な顔にさえ見えました。

九月二十二日、安本さんのお葬式がありました。

園内教会聖生会の神子澤悦子さんのオルガン演奏が始まりました最後の権さんの遺族代表のあいさつが続いている間、私の目にはイエス様の十字架が見えました。七十年間保養園というところに隔離され人間らしい生活、人間らしい喜びも味わうことなく苛酷な境遇で苦

しみながら長い長い呻吟と絶望を積み重ねてきた安本さんにイエス様は愛と救いの手を差し伸べて下さったのでしょうか。

時代的貧困という十字架を背負つて日本に渡り、左手には病氣という途方もない苦痛の生を釘つけられました。そして右手には無学で、しかも韓国人だという理由として差別を固く釘つけられました。また足には九十年以上も続いた強制隔離政策によつて懐かしい故郷へ帰れない釘がつけられていたのです。

しかし、安本さんは今も生きておられる主イエス様と保養園で出会い、イエス様の十字架と復活の福音によつて救われました。病氣と差別に釘つけられた両手は教会の「奉仕」の両手になり、「らい予防法」に縛られた足は復活の喜びの足になつて私と廊下で出会つたのです。それから保養園の心を込めて治療、看護、介護に尽くしてくださつたよい先生たちや療友たちとの幸せな遠足も神様の恵みと慈しみが溢れる杯でした。お葬式が終わリアメリカから来た権さんは、安本さんの遺品の整理や法的ことで園内にある宿泊所にしばらく泊まつっていました。私はお葬式の次の日、夫と一緒に権さんが泊まつてゐる宿泊所を訪ねました。そこで北海道から來た安本さんの奥さんの弟さんご夫妻

と世話人の坂本さんと食事をしながら長い話ができました。日本語が分からなかつた権さんにとってその日は十年間話せなかつたことを全部話せたようで大変喜んでいました。その日、みんなは安本さんに導かれ保養園へ楽しい遠足に来てているのだと思つたでしよう。主は苦しい呼吸のような安本さんの九十四年的人生を主の青草の原、憩いの水のほとりである保養園へ導かれました。

はじめに申し上げた千祥炳という詩人の両親も戦争中、働きに日本に渡つたと思われます。それは千祥炳にも安本さんにも「死の蔭の谷を行く」時代でした。

それから二人の人生にはいくつもの「死の蔭の谷」が待つていました。千祥炳の「歸天」という詩には「我、天に帰る」という表現が三回も出ています。詩編23章6節にも「主の家にわたしは帰り」という表現があります。何回の死を経験した千祥炳にとつてこの世が美しい遠足に思えた理由は彼の中があつた信仰からでしょう。私は詩人千祥炳の人間の死を超えた美しい死の取り方から安本さんの詩編を聞いていた遠足の顔がオーバーラップして仕方がありません。

今年の四月も松丘保養園の桜の花は満開になるで

しょう。この春はアメリカの権さんと一緒に安本さんの園内散歩コースをまわり、桜の花筏を眺めながら安本さんの愛唱曲「湯の町エレジー」を歌つてあげたいです。そして「主の家にわたしは帰り」と告白していくださつた安本さんの美しい最期のお顔を覚えつつ主の平安の本に（み許）帰られ、休んでおられる安本さんのことを語り継ぐ者にしたいと思います。今も保養園の病床にいらっしゃる皆様の上に、見える病や見えない病で苦しんでいるこの世のすべての方々の上に、主の大きな慰めが与えられますように！

言葉足らぬこの文を安本さんに謹んでお捧げいたします。

金 美淑（キム ミスク）さんは、日本に一年間留学後、韓国で日本語教師として勤めていました。二〇一三年に工藤浩栄さんと結婚し、現在青森市に在住です。

野の花の微笑み

ほほえ

比 良 信 治

(12) 銀蔵の復帰した生活

佐久間文太郎は昨日、豊岡銀蔵より電話を受けたが、ようやく療養所より社会復帰した生活が定まつたと思って、ほつとした。このことを、青森の松丘園の園長先生に報告しなくてはならないと思つていた。

文太郎は久し振りに丸顔の園長先生に電話をした。交換手から園長に伝わった。文太郎は、一週間を午前と午後にわけての訪問ボランティアの仕組を報告すると、白木園長はその仕組と十四人のボランティアが交互に、銀蔵を訪問して話相手になり、街に出掛けるやり方に驚きと喜びが湧き上がり、「文太郎さんの手さばきはすごいですね。こんなやり方のボランティア訪問は初めて知りましたが、あなたはさすがベテランの人ね。」と、女性園長の溜め

息まじりの喜びの声を伝えた。

「銀蔵さんは、それでは毎日元気ですね。本当に故里に帰つてよかつた。やっぱり社会復帰の受け入れ方法を考えなくちゃねえ。今まで失敗もあつて帰つてくる人がいましたけどね。ところで病気に対する反応はどうですかね？」

「いやー、それが全く無いんですよ。ハンセン病つてこわい病気だったという思いがないんですかね、しかも完全に治つているし、通常の病気をした人の退院者という受け方ですね。ボランティアの方々よリは、病気についての質問はひとつもないんですよ。」「そうですか。やつぱり北海道は新しい天地なのでですね。まあ、それは良かったですね。とくに何か起こりましたらお知らせ下さいね。ともあれ、ありがとうございました。私も安心いたしましたわー」

「とくに何か起きましたら、ご報告いたします。

園長先生もお元気でー」と言つて、恵子のことを話

そうかと思つたが、今は飲み込んでしまい、電話

を切つた。しかし、その後、一週間位たつてから園

長より文太郎に電話が入つた。用件は秋に青森市で、

日本ハンセン病医学会があるが、文太郎より小樽に

社会復帰した銀蔵さんの受け入れ方式とボランティ

アの活動について、特別に報告して欲しいという依

頼であった。文太郎にとつては異例の発表であるが、

少しでもお役に立つのであれば協力したい思いがあ

るだけに承諾した。そのことを育成園園長にも報告

した。

こんな一幕が起きているとは知らない銀蔵が、手

た。

宮の先の特別老人ホーム育成園にボランティアの武

内夫人と共にやつてきた。武内マサ子さんは、ご主

た。

人に先立たれ、ひとり息子はS市の知的障害児者

た。

ホームで働く人で、育成園ボランティアのリーダー

た。

のひとりであつた。文太郎は武内さんを尊敬してお

り、いつも優しく控えめな態度で接し、いざとい

う

時には、すばやい動き、反応を示す方であつた。

ボランティアの間違いを密かに正していくリリー

ダーアつた。豊岡銀蔵さんのボランティアグループのまとめ役にお願いしている人だつた。

銀蔵は武内さんの案内で、三階、二階の男女や夫婦組の入居状況を見て、一階の体育館や各集会室を廻ってきた。各階の居室は個室であるが、八人が向かい合つた居室となり、中心の空間が廊下であり、食堂兼応接や勉強室でもあつた。片側に共同入浴室が付いており、洗面台とトイレは居室八畳間に付いていた。居室にはベッドが入り、丸テーブルと椅子と物入れ間が付いていた。

こういう八人平均のグループ室が各階に四つあり、夫婦居室が十室用意されて、定員八十四人となつていた。青森の療養所より比べたら雲泥の違いがあつた。

この日、銀蔵は見学して、一人住まいするよりも、友人があるので楽しいかもしれない、と思つたが、当分の間、ひとり住まいの生活を楽しんでみたいと考えた。特に病気になつて寝るようになれば、老人ホームの厄介になりたいと思い、文太郎にもそのことを話した。

恵子は、久しぶりに、園長診察室の待合室に入つ

なつて欲しいわ。お願ひよー」

て順番を待つていた。函館で姉夫婦や文太郎と相談した、保母養成学校に入学する相談であつた。健康相談ではなく、身の上相談であつた。これも療養所の特色であつた。

園長先生は微笑んで励ました。恵子は頭を深々と下げ、一礼した。

「どうかよろしくお願ひ致します」

白衣を着た白木園長はお医者さんであつた。恵子は、病氣が治つた後の生活について、姉夫婦と相談した、保育所保母の資格をとつて働きたいことを述べた。

「今から勉強して、保母養成所の定時制に入学したい」と、園長に希望を述べた。園長は微笑んで聞いていた。

「まず合格するように勉強しなくちゃね。それにしても定時制を希望するのは、療養所のことを考えた

医学部に入つたんですよ。子どもは夢があるから楽しいですよ。しつかり勉強して、頑張りなさいよー」

恵子は、園長先生に励まされて嬉しかつた。文太郎にこのことを早く知らせたかった。園長診察室を出て、交換電話の部屋に向かつた。幸いにも、文太郎は施設の部屋にいて電話に出ることができた。文太郎も喜んだ。昼の学校に通うようにはかつてくれしたことや、学校長に紹介して下さることは嬉しいことだつた。

しかし、松丘園でも社会復帰する入所者のために、自動車や通信技術、電気技術などの資格を取るための短期養成所や学校に通うことを見込んでいた。社会に出て働くために技術の資格を入手することは生

命線でもあつただけに、療養所も奨励していた。現に、ホテルのボイラーマンや電気係、通信係として働いて成功している先輩も幾人もいた。

「本当にですか！嬉しいですわ。遠い夜道を歩かないでみますし、大変助かりますわー」

「わたしから学校長にお願いしますわ。あなたなら障害を越えて立派な保母になるわ。わたしもそう

しかし、恵子は片足に障害があり、義足を持つ身

であった。

であるので、たとえ保母の資格を持つたとしても、採用する保育園があるかは、難しいところだと、文太郎も考えていた。その園長や職員に暖かい配慮がなくては、採用は難しいと思つただけに、理解がある保育園を探すのも、これから仕事のひとつだと考へる文太郎であつた。

そんなことを考へる文太郎に、恵子より手紙が届いた。恵子は勉強中だというが、保母になつた後に結婚したいので、ぜひ恵子と同じキリスト教信者になつて欲しい、という内容の手紙だつた。

恵子の両親はキリスト教を信奉し、カトリックキリスト教の信者であつた。そのため、姉も恵子もカトリックの教会に子供の頃より通い、函館では元町カトリック教会に通つていた。結婚式はカトリック教会で行い、神様の導きによつて新婚生活に入りたい、という希望が述べられ、小樽にはカトリック富岡教会といふ古い教会があると指摘されていた。

文太郎は毎日、富岡教会の前を通つてるので名前と建物は知つていたが、中に入ったことは、教会のバザーの時に友人と行つたことが二度あつただけ

文太郎の両親は仏教で、父の葬儀は禅宗で行われたが、信仰を持つにいたつていなかつた。

しかし、今の文太郎には、恵子の示すキリスト教の道にすすむことは新しい希望の道のようでもあり、恵子の示す通りに勉強していきたい、という考えを持つた。どうしていくべきかは、恵子に聞くとしても、近くにある富岡教会を訪ねてみようと思つた。きっと、そこから道は開けるのではないか、と考えられた。恵子に返事を出す前に、まず富岡教会を訪問してみようと考えた。善は急げと、その翌日に教会に昼頃に電話を入れてみた。電話に出たのは意外にも女性であつた。

「わたしは教会の近くに住む者ですが、おたくの教会のことを少し知りたくてお伺いしたいと思つて電話いたしました。」

すると、若い女性の声は、「ちよつとお待ちくださいませ」と言つて、間が空いて、太い男の声が入つてきました。

「ハイ、富岡教会の神父ですが、どういうご用件でしょうか？」

と、言われたので、キリスト教のことを勉強したい

ので伺いたいと述べると、お勤めの方ならば、午後六時すぎの夜間か、日曜ならば、『ミサ』というお祈りの時間に合わせて、お出でになつた後にお会いでります、と述べられた。

文太郎は「それが一番いい」と思つて、名前を述べて日曜の十時に教会のミサの儀式に行くことを承知して、電話を切つた。

日曜日には、日数があつたので、富岡教会に行くことを書いて、自分も勉強することを恵子に手紙を送つた。

幸いにも、老人ホームに来るボランティアの中に、富岡教会や住吉教会というカトリック教会に籍を置く信者の方がいることを知つた。何れそのボランティアの方々にもお会いして、キリスト教のことを学ぶようにしたいとも考えた。一方、恵子は保母養成の目標のもとに、新しい勉強を始めた。文太郎はキリスト教という新しい勉強に取り組むことになつたので、生きる上に目標ができて、張り合いが生まられてくるようで、文太郎は内心喜んだのである。

人事異動①

【退職】(3月31日付)
《定年退職》

庶務係長	千葉 清子	施設管理係	佐藤 篤徳
車庫長	石山 肇	副車庫長	中村 修
看護助手	稻葉 英一	副放射線技師長	石橋 克拡
看護師	加藤美智子	看護師	斎藤 浩子
臨床検査技師	竹内美代子	看護助手	大隅 明美
看護師	長内 妙子	看護師	長内 みゆき
看護助手	今 みゆき	《辞職》	吉澤 忠司
看護師	須藤真由美	外科医師	

(つづく)

短
歌

白樺短歌会

風に散り果つ

滝田十和男

亡き妻の逝きたる朝も春雪の降り居たりけり二十年経ぬ

呆け呆けと日々を重ねて生くる身に亡妻の二十回忌の早やめぐり来ぬ

スニーカーに墓参の供花をくくりつけ雪溶け道を独りきにけり

汝が眠る丘の墓処は春萌えの兆し促す風つよく吹く

冬の間に溜まりし落ち葉片づけて墓のめぐりに暫し安らぐ

独り身の老いを重ねて二十年経たるは長くまた短くも

冬はまだ去りがたくて残雪の汚れしままに樹の下厚く
ひたに恋ふ春の陽射しを見せぬまま四月半ばの雲厚き空
訪ね來し学生たちと納まりしカメラの前に唇の締まらぬ

洗礼を受けたまひし小野神父のゆかりのひとも尋ねくる春
いのち有りて出逢ひの時を恵まれて重ねし老いの今を尊ぶ
耳遠くなりしを嘆くことなけれ雑音などは聴くに由なく
補聴器の更新されて幾らかはひとの話も解り来にけり

老齢の身にありがたく差し替へて補聴器の今日新しくなる
桜川通りの夜景見せて夕ぐれのバスに集められたり
どこ迄も並木の桜樹をつなぐ電飾の灯りに映ゆる街行く

今日もまた何か新しき事ありそうで立ち上がるとき腰伸ばすなり
飽きもせずテレビの前に座りつつ何時か睡魔に身をゆだね居り
恒例の花見の席に会ふひとの少なくなりぬ老いの進めば

初物のワラビ今年も頂きて野にも確かな春めぐり来ぬ

見栄え良く咲くこともなくわが庭の桜呆気なく風に散り果つ

人事異動②

【再任用】(4月1日付)

施設管理係

佐藤 篤徳

看護師

加藤 美智子

看護師

齋藤 浩子

看護師

高橋 美喜子

会計班長

大木 良夫

(福島病院算定・病歴係長へ配置換)

外科医師

横山 拓史 (青森県立中央病院へ出向)

看護師

秋田谷信子 (弘前病院看護師へ配置換)

【転入】

会計班長 三橋 守人 (青森病院専門職より転任)

庶務班長

狩野 智行 (八雲病院契約係長より転任)

診療放射線技師長

白戸 俊一

(福島病院副診療放射線技師長より昇任)

看護師長

寺嶋美由貴 (八戸病院より転任)

看護師

佐藤 未季 (東北新生園より転任)

【採用】(4月1日付)

外科医師

岡野 健介

外科医師

長瀬 勇人

(以上3月31日付定年退職)

会計班長

大木 良夫

(福島病院算定・病歴係長へ配置換)

看護師

今 尚美 (賃金職員より)

看護助手

下山由美子 (賃金職員より)

看護助手

田中ひとみ (賃金職員より)

看護助手

津嶋 秀明 (賃金職員より)

看護助手

成田 美奈子

看護助手

相馬 貴子

保育士

高橋 美喜子

【昇任】(4月1日付)

作業手

吉田 寿 (自動車運転手より)

作業手

関谷 恵悦

【採用】(4月20日付)

臨床検査技師

渡邊 晴香

【退職】(4月30日付)

看護助手

賀山 育子

☆松丘のニューフェイス紹介☆

昨年十月から当園で働く新人の方々の紹介です。

(順不同)



佐藤 未季(さとう みき)
①治療棟 外科 看護師

①勤務場所

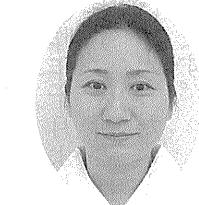
②あなたが自慢できることはなんですか?

③一言挨拶



渡邊菜穂子(わたなべ なおこ)

①第1センター 看護助手



河田 朋子(かわuchiともこ)

①中央センター1階 看護師

②柔道初段です。(20年前ですが…)

③四月から1センター勤務となりました渡邊です。

松丘保養園で働くことに感謝しております。一生

懸命頑張ります。厳しくご指導の方よろしくお願ひいたします。

②整理・整頓

③毎日園内を迷っている河田です。昨年出産し、一年間看護から離れていました。新たな気持ちで日々成長していきます。皆様よろしくお願いします。

②好き嫌いなく、何でも食べます。

③毎日戸惑いの連続ですが、外科へ来棟される方々の処置を一日でも早く覚えられるよう、日々の勉強しておりますので、これからも、よろしくお願ひ致します。



成田 美奈子(なりた みなこ)
①中央センター2階 看護助手



村上佳巳(むらかみ よしみ)
①病棟 看護助手

②体が丈夫なこと

③中央センター2階勤務の成田です。一日でも早く仕事を覚え、入所者の皆さんと話しをする時間を増やしたいです。

②笑顔です。

③昨年十月より病棟にて勤務させていただいております。入所者様、患者様がより快適に過ごせるように頑張りたいと思つております。宜しくお願ひいたします。



葛西 千瑞江(かさい ちずえ)
①病棟 看護師



白戸俊一(しろと しゅんいち)
①診療放射線技師長

②お菓子作り

③四月から病棟に配属になりました葛西です。入所の方々が安心できる看護ができるよう、日々精進していきたいと思います。宜しくお願ひいたします。

②特に自慢できるようなことはございません。

③旧青森病院以来、十八年ぶりに青森市民となります。皆様のお役に立てるよう、努力してまいりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。



関谷 恵悦(せきや けいえつ)

①園芸作業手



渡邊 晴香(わたなべ はるか)

①臨床検査技師

②〇型のせいいか、誰とでも仲良くなれる事

③ここにちは、日々皆さんより、色々アドバイスしていただき、成長させてもらっている事に感謝いたしました。今後とも宜しくお願ひします。

②特にないです

③新卒なので、まだまだわからないことばかりですが、検査を通して皆さんのが健康のお役に立てるよう頑張っていきたいと思います。これからよろしくお願いします！



前田 秀司(まえだ しゅうじ)

①園芸作業手



相馬 貴子(そうま たかこ)

①さくら保育園 保育士

②創意工夫する事

③緑の多い松丘保養園で園芸の仕事が出来る事になりました。大変嬉しく思っています。入所者の方々に心和む自然環境を楽しんでいただける様努力してまいります。

②家族と友人が私の自慢です。

③保育士として経験を重ねていますが、子供や保護者の方に信頼され、お役に立てるよう精一杯頑張りますので、宜しくご指導くださいますよう、お願ひいたします。

自治会日誌 ○印 自治会

二月中

1日○男 七十九歳逝去 青森県出身

2日○平成26年度第1～3四半期国費予算説明

6日○第9回執行委員会

9日○第10回執行委員会

13日 全国国立病院院長協議会第2回北海道東北支部総

会（仙台）

17日○地区連絡係定例集会

〃 ○倫理委員会に石川会長出席

20日 歌っこ広場

〃 ○第11回執行委員会

〃 ○藤保育園慰問（成長およろこび発表会）

24日○岩手大学6名来園、石川会長が園内を案内

25日○全療協本部中執会議に出席の為、石川会長出張

（～26日帰園）

26日○園内教育研修セミナー「感染症対策と人権」、

講師 国立感染症研究所・ハンセン病研究セミナー

森 修一先生

三月中

2日○園内教育研修セミナー「高齢者の心の問題」、

講師 弘前駅前メンタルクリニック院長

菊池淳宏先生

3日○真宗大谷派北海道教区5名来園、石川会長が講演

6日○第12回執行委員会

〃 ○ライフサポートチーム会議に石川会長出席

7日○「松丘保養園の将来構想をすすめる会第7回総会」

に執行委員3名出席

11日○真宗大谷派（蓮心寺）本間氏来訪

12日○保健科運営委員会

〃 ○第13回執行委員会

13日 国立ハンセン病療養所施設長協議会・施設長連絡

会議（東京）

〃 ○除雪作業員8名、作業終了の挨拶に來訪

17日○倫理委員会に石川会長出席

〃 ○地区連絡係定例集会

〃 ○女 七十七歳逝去 青森県出身

〃 ○男 七十五歳逝去 青森県出身

24日○真宗大谷派（蓮心寺）本間氏来訪

26日○東谷商店との売店契約

〃 ○3／31付退職、4／1付転出職員、挨拶に來訪

26日○秋田県ふるさと芸能お届け事業「大正琴の演奏」
27日○園内教育研修セミナー

〔思い出パートナード回想を通した高齢者との関わり　よい聴き手であるために〕」

講師　日本福祉大学社会福祉学部　野村豊子先生

31日○(有)ローザリー資源　田中桂子専務取締役、挨拶に來訪

○3／31付退職、4／1付転出職員、挨拶に來訪

○離任式

○3／31付退職、4／1付転出職員、挨拶に來訪

四月中

1日○4／1付転入、採用職員　挨拶に來訪

2日○園幹部と執行委員顔合わせ

○青森県健康福祉部保健衛生課　石岡氏、外2名挨拶に來訪

3日○第14回執行委員会

6日　青森地方法務局来園

8日○青森県議会議員選挙不在者投票日

10日　歌っこ広場

○第15回執行委員会

12日○青森県議会議員選挙

14日○議懇幹部との面談の為、石川会長出張

14日○倫理委員会に佐藤副会長出席
（～15日帰園）

○第4四半期自治会会計業務監査（～15日）

厚生労働省政策医療推進官来園

○地区連絡係定例集会

17日○第33回園内クリーン運動（桜の植樹）

20日○支部代表者会議に出席の為、石川会長出張

（～22日帰園）

24日○平成27年度観桜会

28日○桜の植樹に、さくら保育園、藤保育園の園児等が参加

30日○天理教布教部福祉課12名来園、石川会長が講演

編集後記

◇4月28日、当園のさくら保育園児と昨年も植樹に訪れた藤保育園児と、入園者が一緒に桜の植樹を行うことになつた。当日は、天気に恵まれたこともあつたが、園児と一緒に植樹出来ることを楽しみに沢山の入園者が参加、2月に百歳を迎えた村上芳子さんらが満面の笑みで植樹に臨んだ。

高齢化と不自由度が一段と進む療養所内で、この日ばかりは子供達の笑い声が溢れ、入園者は最高の元気の素をもらつたひとときとなつた。

（佐藤　勝）

松丘保養園慰安会 賛助会員募集

一般財団法人松丘保養園慰安会は、ハンセン病問題の啓発活動を行い、偏見差別のない社会の実現に寄与することを目的としております。

そのため、多くの団体、個人の皆様からの深いご理解と財政面でのご支援をいただくことが不可欠です。

☆募集の対象 趣旨に賛同して下さり、松丘保養園を見守ってくださる方
(入園者、職員、退職職員、一般の方など、どなたでも構いません)

☆年会費 個人会員 1口 1,000円
法人会員 1口 5,000円

☆申込方法 入会申込書を松丘保養園福祉室で配布しておりますので、
お問い合わせください。

「慰安会」新名称の募集について

従来の「慰安会」という名称は、古くから使われて来た名称ではあります、もっと親しみやすい名称を募集しております。

ご意見、アイディアがありましたら、松丘保養園福祉室までお寄せください。

一般財団法人 松丘保養園慰安会

(国立療養所松丘保養園福祉室内 高山 忠久)

〒038-0003 青森市石江字平山19番地

電話 017-788-0145 (内線200番)

園内の出来事

離任式 3月31日



今年度は7名の方が離任式に臨席。



百歳の村上芳子さんも介護員さんにお別れを。

青森日本花の会寄贈苗木の植樹 4月17日



入園者と職員が力を合わせて、1本の苗木に思いを込めます。

平成27年度観桜会 4月24日



恒例のカラオケ大会。



「木もれ陽の歌」の飛び入りも。

国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で106年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地

青森市大字石江字平山十九番地

園長 川西健登

保有敷地

二三〇、五四八平方米
(六九、八六三坪)

建て面積

三〇、三五八平方米
(九、一九九坪)

延べ面積

三六、〇三六平方米
(一〇、九二〇坪)

交通案内

電車の便

1. 東北新幹線・新青森駅下車
(車で約3分)

2. 奥羽本線津軽新城駅下車
(車で約5分)

バスの便

1. 青森市営バス西部営業所行

2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石
行き 共に松丘保養園前下車

航空機の便

青森空港より (車で約30分)

高速自動車道の便

青森ICより (車で約5分)

□なお保養園に隣接して桜の名所三
内園 (1 km) と国の特別史蹟指
定の三内丸山縄文遺跡や県立美術
館 (2 km) 等があります。

発行所

一般財團法人 松丘保養園慰安会

所在地

〒〇三八一〇〇〇三

青森市大字石江字平山十九番地

電話 (017)(788)〇一四五・〇一四六

発行人 川西健登

編集人 甲田の裾編集委員会

印刷所

青森市本町二丁目十一―十六

青森オフセット印刷株式会社

電話 (017)(775)一四三一一番